

海が育んだ鹿児島の歴史

③ 中国人と城下町

■ 中国人の占いで築かれた鶴丸城

天保十四(一八四三)年薩摩藩が編さんした『三國名勝図会』に、「公(第18代当主島津家久、あらかじめ投下(家臣)の明人江夏友賢に命じて、この地をト(占い)せらる。友賢占して曰く、是四神相応の地にして大吉なり」と、鶴丸城は中国人の江夏友賢(黄友賢)の占いに基ついて築かれたと書かれている。

江夏友賢は、中国福建省の出身といわれ、医学・兵法・儒学・風水などに通じていたため島津義弘(家久の父)に重用された。義弘が隠棲した加治木町(現始良市)麓の町並みも彼の占いで築かれている。

■ ボサド

鶴丸城だけではない。『三國名勝

図会』には、今も地名として残っている「菩薩堂通(ボサド)」は、寛永七

(一六三〇)年、中国人の黄一官などが航海の女神・媽祖(天妃・観音菩薩とも)を祀るために建てた菩薩堂(その名の起こりだとも記されている。江戸時代中頃、菩薩堂は火災に遭い、江門時代中頃、媽祖像は当時祇園之洲にあつた永福寺に移されたが、この永福寺も、寛永十四(一六三七)年、黄一官・高一覧・陳友官が創建したもので、この寺にも別の媽祖像が祀られていたという。

さらに、清滝川には一官橋・二官橋・三官橋が架けられていたが、『薩摩医学史』によるといずれも鹿児島に住んでいた中国人・沈一貫にちなむものだという。また、『島津国史』には、三官橋

は、近くに中国人医師・許三官の屋敷があつたからだと言われている。

■ 鹿児島のまちづくりと中国人

鹿児島県立図書館に「鹿児島城下町割図」という絵図がある。寛文十(一六七〇)年ごろのもので、鹿児島城下を描いたものとしてはもつとも古い。

この絵図に描かれている海岸線は、現在の市役所前の電車通り通り。電車通りの東側(左地図の下側)は海であつた。甲突川は南林寺(現・松原神社)辺りで海に注いでいる。現在の清滝川は当時の甲突川だったのである。

鹿児島城下の埋め立ては、正保年間(一六四四〜一六四八)にはじまつたという。十七世紀末には今の金生町・小川町辺りまで埋め立てが進んだ。

尚古集成館 副館長

松尾 千歳

【プロフィール】

昭和58年鹿児島大学卒。同年、尚古集成館に入館し、学芸係長・文化財課長を経て、平成18年から副館長。島津家や薩摩藩の歴史・文化を研究。福岡県出身。

甲突川がいつ付け替えられたか定かではないが、『三國名勝図会』では、清滝川が甲突川の跡と伝えられていると曖昧な記述になっていることをみると、付け替え工事は編さん時より百年以上前、十八世紀初頭以前におこなわれたと推測される。

十七世紀中頃から十八世紀初頭にかけて大規模な土木事業が急増した背景に、中国の、「明」の時代から「清」の時代への交代(一六四四年、明国滅亡)があるのではないかと思つている。笠沙(現・南さつま市)の林家には、先祖は鄭之龍とともに清に抵抗した武將で、薩摩に逃れ干拓の技術で島津家に仕えるようになったという伝承がある。三万四千石もの増高を生み出したという大隅の串良開田事業



（二六五八〜一六八二）を指揮した汾陽光東は、島津義久・義弘に仕えた中国人医師汾陽理心（郭国安）の子孫である。汾陽理心・光東の墓は鹿児島市冷水町の興国寺墓地にある。

「明」「清」の交代による戦乱を避け、鹿児島に逃れてきた中国人たちが、鹿児島のみちづくりに関わっていたように思えてならない。

鹿兒島城下町割図(鹿児島県立図書館蔵)

寛文10(1670)年頃の鹿児島城下の様子を絵図にしたもの。図の中央が鶴丸城。左側の青い線は甲突川。右側の青い線は稲荷川。



長崎市内にある「崇福寺」

寛永6(1629)年、長崎で貿易に従事していた福建省出身の中国人たちが建てた寺。鹿児島城下にあった、「菩薩堂」や「永福寺」は、この「崇福寺」のような中国寺だったと思われる。



整備された清濁川通りの「二宮橋」跡にあるモニュメント

清濁川の上には、平成23年2月、鹿児島市が散策などを楽しめる親水空間・歩行者空間を整備した。